

京都大学	博士 (社会健康医学)	氏名	河村 太一
論文題目	Influence of comorbidities on the implementation of the fundus examination in patients with newly diagnosed type 2 diabetes (新たに2型糖尿病と診断された患者での眼底検査実施に対する併存症の影響)		
(論文内容の要旨) 背景：糖尿病網膜症（以下、網膜症）は、糖尿病発症後、数年から10年以上で発症し、進行により QOL を低下させるため、糖尿病を長期管理する上で重要な合併症である。網膜症の初期・進行段階のいずれでも自覚症状を欠く事が多いこと等から、糖尿病発症早期からの管理が重要であり、糖尿病診断時及び年1回以上の眼科受診が推奨されている。欧米の複数の定期受診状況に関する報告と比較して、日本の受診割合は低く、実態も明らかになってない。また、網膜症の発症・進展と関連し、かつ糖尿病と高頻度に併発する高血圧や脂質異常症を有する糖尿病患者では、発症早期からの眼科受診の重要性が増すが、その実態は明らかでない。 目的：診断早期の糖尿病患者での眼検査実施割合、並びに網膜症の発症・進展に関連する高血圧・脂質異常症の併存と眼検査実施との関連を調査する。 方法：(株)日本医療データセンターの健保組合のレセプトデータ（使用期間：2005年1月～2013年3月）を用いて、糖尿病患者を対象に後向きコホート研究を行った。対象は選択基準（糖尿病診断のある患者）を満たし、除外基準（1型糖尿病、20歳未満、糖尿病治療薬処方1回以下、追跡期間が1年未満、データ化開始後9ヵ月間以内に糖尿病診断有、過去に網膜症診断有、基準月[糖尿病に対して初めて治療薬処方のあった月]の過去6ヶ月間に眼の疾患・検査・処置有、糖尿病治療施設情報無）のいずれにも抵触しない者とした。対象患者は、基準月の過去6ヵ月以内での治療薬処方の有無を基準に、高血圧又は脂質異常症（以下、併存症）を有する群と有さない群に分類した。主要評価項目は基準月から1年以内の眼底検査実施の有無、副次評価項目は併存症の有無と眼底検査実施との関連とした。調査項目は、基準月の患者背景として性別、年齢、インスリン処方の有無、入院の有無、糖尿病治療施設及び、過去6ヵ月間の既往歴の有無、その他、基準月以降の網膜症の有無とした。統計解析は、主要評価項目には記述統計学的手法、副次評価項目には多変量ロジスティック回帰分析を用いた。また基準月に病院とクリニック両方を受診した患者を除く集団での感度分析、及び医療提供者側の影響確認のため、併存症のある患者について、併存症と糖尿病の治療施設の同異で分類したダミー変数を用いた回帰分析を行った。 結果：対象患者は6,492人で、1,044人（16.1%）は併存症があった。基準月から1年以内の眼底検査実施割合は34.1%であった。患者背景因子で調整したロジスティック回帰分析では、併存症のある糖尿病患者は併存症の無い糖尿病患者と比較して、眼底検査を受ける割合が低く（オッズ比 0.57; 95%信頼区間			

0.48-0.68; P<0.001)、感度分析でも同様の結果であった。ダミー変数を用いた回帰分析では、併存症と糖尿病の治療施設が同じ患者は、併存症の無い糖尿病患者と比較して、眼底検査を受ける割合が低かった（オッズ比 0.52; 95%信頼区間 0.43-0.63; P<0.001）。

結論：薬物治療開始後1年以内の眼底検査実施割合は約3割であった。併存症のある糖尿病患者は眼底検査実施割合が低く、特に併存症と同施設で治療された患者で低かった。本結果は糖尿病患者の眼底検査実施割合の向上に有用な情報となり得る。

(論文審査の結果の要旨)

糖尿病網膜症（以下、網膜症）は進行しても自覚症状を欠く事が多く、また眼科初診までの期間が長い程進展の危険性高い。このため糖尿病患者での早期からの眼科受診は患者の QOL 維持にとって重要である。糖尿病患者の眼科受診状況については以前より報告されているが、診断早期の糖尿病患者での実態は明らかになっていない。本研究では、健康保険組合のレセプトデータを用いて、新たに糖尿病と診断された患者での初回治療薬処方後1年間の眼底検査実施状況、並びに網膜症の発症・進展に関連する併存症（高血圧、脂質異常症）と眼底検査実施との関連を調査した。その結果、1年以内の検査実施割合は、全体で34.1%であった。併存症と眼底検査実施との関連をみた多変量ロジスティック回帰分析では、併存症のある糖尿病患者は併存症の無い糖尿病患者と比較して、眼底検査を受ける割合が低かった。また医療提供者側の影響を確認するため、併存症と糖尿病の治療施設の同異を考慮した追加解析を行った結果、併存症と糖尿病の治療施設が同じ患者は、併存症の無い糖尿病患者と比較して、眼底検査を受ける割合が低かった。

本研究は、糖尿病の重症度等の患者背景の把握に限界があるものの、検査実施状況の実態、影響因子の解明に貢献し、今後の眼科受診向上に向けた取り組みに寄与するところが多い。

したがって、本論文は博士（社会健康医学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、本学位授与申請者は、平成30年3月29日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。

要旨公開可能日： 年 月 日以降